高峰元稙の実像と虚像: 高峰譲吉の伝記に見る父親像

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/16845

〔追加討論〕

高峰元稑の実像と虚像

高峰譲吉の伝記に見る父親像

金沢市　板垣英治

高峰譲吉の伝記は多種が出版されている（1—8）。その伝記には必ず父親元稑についての記述がある。例えば、大正二年に製薬会社「三共」を高峰譲吉と共に設立した塩原又策が、昭和元年に出版した伝記『高峰博士』（1）には次のように父親元稑について記述されている。

「高峰博士の父君精一氏は、前田侯の典医としても相当の功績を挙げた人であるが、化学者としての功績は、真に没すべからざるものがあった。壮猶館の技術者として、火薬の材料たる硝石の製造に注目し、＊ドンドル即ちパーカッションカップの製出を工夫した。由来加賀は山国であるから、藩内到る所に養蚕並びに製糸が盛んであった、精一氏は、此製糸家の廃物たる蚕蛹を、切草に混じて堆肥の如くに桶に入れしめ、水を注ぎて各家の床下に之を貯蔵せしめた。これは蚕蛹の有する窒素分が酸化して硝酸塩類を生ずる自然の機転を促がしたのであって、別に木灰を約六箇月間蓄積せしめ置いて、其灰汁を取り、之を前の硝酸塩類と混じ、釜に入れて煮沸せしめ、次で之を桶に取りて放置すると、器底に結晶が出来る。それが即ち硝石—硝酸加里—であって、火薬の重要原料である。（中略）即ち高峰博士が、後年世界的の大発明家なる名誉を博したのも、亦其学問が実用に重きを置かれたことも、皆此父君の大なる感化に因るものと思われるのである。」（太字は筆者変換）

＊ドンドル＝オランダ語　Donder 雷であり、雷酸＝Donder zuur である。パーカッション　カップ＝Percussion cap ＝ 撃発雷管である。雷管をドンドルと呼んでいた。

この塩原の文章にしたがい、昭和六年に橋爪恵が『巨人・高峰博士』で同じことを記述し、これが色々と修飾されて近年にまで続いている（3—8）。例えば三浦孝次著『加賀藩の秘薬』（3）では、

「元稑の任務は造硝（火薬原料硝石の製造）のことにあった。安政二年より火薬の研究に従事したところ、同三年三月七日製薬所から出火し、役人数人死亡多数の負傷者を出した。そればかりか貯蔵中の火薬に引火し、大爆発を起こした。この時から藩は火薬の製造を中止し、元稑は責任者として苦境に陥らねばならなかった。しかし、彼はこの間、

越中五ヶ山の農家で硝石を製ることを拡め、その製造に力をそそいだ。これは大きな成果をおさめた。」

この文章では、史実を全く無視した記述が多くされていた。さらに、真鍋繁樹著『堂々たる夢（高峰譲吉の生涯）』もさらにフィクションが加わっている（4）。それでは、元稑の史料による実像はどの様なもので在ったのかを次ぎに記す。

先ず、元稑自筆の「先祖由緒並一類附帳」（明治三年）高峰昇（印）には「給禄改高」と記した頁には、本人の履歴が記されている（9）。これから関係事項を抜き書きする。太字の部分は元稑本人の重要事項である。括弧書きは加賀藩・壮猶館関係の重要事項である。括弧書きは加賀藩・壮猶館関係の重要事項である。

安政二年二月　壮猶館舎密方　臨時御用、御雇就
　　同五月　西洋流製薬試　於土清水
同三年十月　命壮猶館舎密方御用、命七人扶持
同六年二月　御医者、壮猶館舎密方御用兼帯
万延元年二月　命大桑製薬所御用　就
文久元年　命壮猶館翻役方御用兼、校合方御用兼帯
　　（新川郡で洋式硝石丘法の指導）
同二年　（塩硝買付け高九千貫を越える）
同三年四月　御軍艦方御用兼帯、能州で石炭調査
　　（硝石製法　翻訳）
元治元年十月（土清水製薬所解体・改築工事始まる）
慶応二年三月七日（壮猶館、爆発事故、死傷者十五名出る）
慶応三年　養生所開設、舎密局惣理
慶応四年四月　養生所棟取
明治三年一月　任権少属、医学館三等教師

この元稑の履歴から、壮猶館で舎密方御用であり、大桑（土清水）製薬所御用であり、加賀藩の火薬製造に重要な関わりを持っていた事を示している。特に安政二年五月の「西洋流製薬試」は、銃砲の洋式化が始まり火薬もこれまでの火縄銃の筒薬ではなく、輸入された洋式銃のために顆粒の堅い火薬を生産することが必要になってきたために、それを製造することを試験したのであった。万延元年三月に製薬所の責任者となった。この年、富山・滑川からの硫黄の買い付けが四千八百貫に達していた。文久二年九月に加賀藩は西洋兵器の採用を決定し、ますます製薬所の役割の重要性が増した。その為には、先ず古い施設であった土清水製薬所を改築して、洋式火薬の生産のための施設を建設することであった。そのために、代替施設として加賀藩は鶴来・小柳に製薬所を建設した。そして元治元年十月か

ら火薬生産のための硫黄は総て新施設に届けられた。無論、五箇山からの硝石も送られたに違いない。また、異国船の来襲に備え、海岸線の防備強化もされ、五箇山の全民家での硝石の大量生産がされた。その結果、慶応二年には硝石の買上高が年一万貫を越えた（10）。

さらに富山・新川郡入善村では、舎密局の松原小四郎により洋式硝石丘法による硝石生産の指導も行われていた（11）。先に記した爆発事故は、慶応二年三月七日に壮猶館の弾薬所内での爆発事故であり、作業にあたっていた者（役人ではなく、ほとんどが全くの素人であった。）が十五人死傷したのである（12）。文献3の「製薬所」は誤りである。当時加賀藩で最も必要なものであったのは、西洋銃のための雷管であった。雷管には雷汞（雷酸水銀）が使用されていた。このことから新しい土清水製薬所では「雷頭製所」「雷頭干場」が設置され、ここで雷管の生産が計画されていた（13）。したがってこの事故の原因は、雷酸水銀の合成であると推定される。従来、藩は毎年、船を長崎に出して、洋式銃や雷管を大量に購入していた（14）。加賀藩の装備が洋式化されていたことは、慶応四年の戊辰戦争での長岡での戦いの記録に記されている（15、16）。この戦争では新政府は、長岡の激しい戦いで戦備の消耗を来たし、加賀藩に弾丸・弾薬・雷管の貸与・補給を要請した（17）。

これらの歴史的事実から、明らかに伝記に書かれた内容は大きな誤りである。さらに蚕蛹と野草を水に入れて静置すれば、細菌により硝酸塩が出来るとするのは（1）、絶対好気性菌である硝化細菌の細菌学的に重要な性質と矛盾することであり、硝酸塩の生産は不可能なことである（18）。

また、先に記した「安政三年三月七日の爆発事故の結果、元稑は責任者として苦境に陥らねばならなかった。彼は五箇山へ行き農家での硝石の生産の指導をした。」とあるが、この五箇山へ行った事実を示す史料は無い。先に触れたが、当時五ヶ山から年一万貫の硝石が買い上げられていた事を見ればこの様な事はあり得ない。

加賀藩では卯辰山に養生所を慶応三年に開設して、町民や貧民の病気治療を始めた。前年の壮猶館の爆発事故にも関わらず、元稑は養生所に設けられた舎密局の棟取に任命された（19）。この舎密局に「雷鴻局」が置かれたと記されているものがあるがこれもフィクションである（3）。さらに、明治三年に加賀藩はこの養生所を大手町の旧津田玄番邸に移して「金沢医学館」とした。そして翌四年三月にスロイスを雇い入れて、オランダ医学の教育と患者の治療が始まった。元稑（明治に入り「精一」と名をあらためた。）は医学館三等教諭となっている（19）。この様に、元稑の履歴には、壮猶館の爆発事故の影響は全

く見られない。明治四年に兼六園内に金沢理化学校が開設され、精一は「綜理」のポストに就いた。しかし、廃藩置県のために翌年には廃校になった。その後、金沢・梅本町の自宅で医師開業したらしい（確証がない）。明治十三年には金沢医学所・金沢病院の分院であった石川県富山病院の院長に就任した（20）。

以上、高峰元稑（精一）の履歴と加賀藩の史料から、ほとんどの高峰譲吉伝記に記述された「元稑像」を比較して、後者は全く史実とは異なったものであることを指摘してきた。文献の調査から、これは塩原又策が最初に創作した「想像上の元稑」であり、それ以後の伝記の作家がこれを受け継ぎ史的事実を無視して、修飾を重ねたものであった。伝記が史的事実を抜きにした創作によって記述されることは許されるものであるか疑問である。

文　献

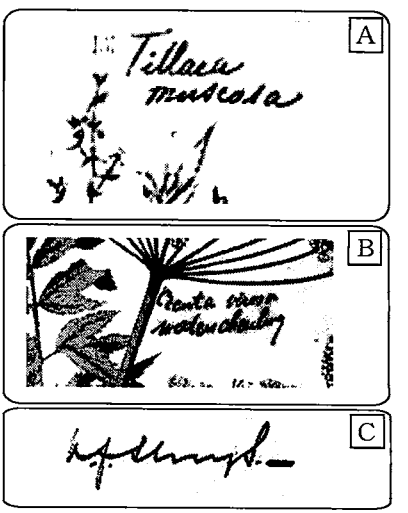
1. 塩原又策『高峰博士』塩原又策編輯（一九二六）
2. 橋爪恵編『巨人・高峰博士』三共、（一九三一）
3. 三浦孝次『加賀藩の秘薬』加賀藩の秘薬刊行会、昭和四四年
4. 真鍋繁樹『堂々たる夢―高峰譲吉の生涯』講談社（一九九九）
5. 池田宣政『高峰譲吉』「世界伝記全集6」講談社（一九五四）
6. 池田宣政『高峰譲吉』ポプラ社・改訂版（一九七六）
7. 山嶋哲盛『日本科学者の先駆者　高峰譲吉』岩波ジュニア新書（二〇〇一）
8. 芝哲夫「高峰譲吉とアドレナリン」「日本の化学を切り拓いた先駆者達（9）」『化学アーカイブス―化学総合資料館設立へ』日本化学会（二〇〇四）
9. 高峰昇「先祖由緒並一書類附帳」明治三年、加越能文庫、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
10. 板垣英治「加賀藩の火薬―1、塩硝及び硫黄の生産」『日本海域研究（金沢大学）』第三三号、（二〇〇二）
11. 「硝石製造方ニ付御触等留、文久二年戌十一月ヨリ、三位組」伊東文書、富山県立図書館蔵
12. 「年寄中席要用書抜、川崎氏留記、諸事聞書留」慶応二年寅三月七―八日、『加賀藩史料藩末編下』、四三六―四三八頁、（昭和三三年）前田育徳会編
13. 「土清水製薬所　六百分ノ一絵図」（後藤家文書）石川県立歴史博物館蔵
14. 「産物金入払帳 長崎店」、慶応三年、加越能文庫、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
15. 「戊辰役旧加賀藩出兵提要」明治元年四月十五日、

『加賀藩史料　幕末編下』八一九―八二〇頁、（昭和三三年）前田育徳会編
16. 加賀藩士小川仙之助「日記」（自閏四月十八日、金沢表出陣、至七月九日、戦争等概記）、石川県立歴史博物館蔵
17. 「軍事御達書」明治元年七月二十七日、『加賀藩史料、幕末編下』九〇九―九一〇頁、（昭和三三年）前田育徳会編
18. 板垣英治「硝石の舎密学と技術史」『金沢大学文化財学研究八』、一九―五八頁、金沢大学埋蔵文化財調査センター（二〇〇六）
19. 藤本純吉「石川県医学沿革記」藤本文庫、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵
20. 赤祖父一知「石川県富山病院・同医学所について。」『医譚』第六四号、平成五年五月（一九九三）

医史学アゴラ③

スロイス一家の筆跡（板垣英治）

オーデマン『オランダの自然史、彩色植物図譜』に書き込まれた植物名。



A: スロイスの筆跡
B: スロイス夫人の筆跡
C: スロイスの息子のサイン
H.F.SLUYS
上記の植物図譜に署名したもの

スロイスの長男は金沢で生まれた。オランダ海軍・南米印度艦隊司令官、H. Ms. Hertog Hendrik 号の艦長として、横浜を訪問し、大正九年五月二〇日に金沢を訪れ、父親の教え子達に会った。その時にオーデマン植物図譜に書入れられた植物名（A・B）を見て、両親が書いたものであることを証明した。

（金沢大学名誉教授）